

二〇一三年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】一 この試験の問題文・設問は、1ページから13ページに印刷されています。

二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。

三 文字は、正しくきちんと書きなさい。

四 、。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕は小学校六年生。クラス担任の久留米先生は、生徒のことを何でも決めてかかるとか。不満に思うクラスメイトの安斎の発案で、僕と草壁、佐久間の四人は、久留米先生の先入観を改めさせようと計画する。ちょうどその年の打点王に輝く野球選手が母校の小学校に野球教室をしにやってくる。僕らは、野球好きの草壁のことを、久留米先生の前で、「彼には、才能がある」と打点王に褒めてもらい、草壁を劣等生と決めつける久留米先生の鼻を明かそうと計画する。安斎と僕は、前日の学校訪問を終えて帰る野球選手に、草壁を褒めて欲しいと直に頼み込む。

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かったから」と校長先生は典型的な言い回しを口にし、「どうして大人はよくそう言いたがるのか」と疑問に感じたが、とにかく、前日とは打って変わり、快晴だった。

午前中の二時間、希望する生徒はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振りを練習した。

担任教師たちのいく人かは

に覚えがあるの

か、生徒たちにまじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目な顔でチョークを使っているだけであるし、体育の授業でも笛を吹く程度であつたから、運動が得意な印象はなかったのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかったらしく、美しい姿勢で素振りを披露した。

「久留米先生、カッコいい」と女子生徒から声上がり、僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになった。

安斎も、僕と似たり寄つたりの、情けないスウィングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなでバットを振っているのは何だか変だよな」と言った。

「新しい組体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

打点王氏は真面目な人だったのだろう、形式的にふらふらと歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、肘や膝を触り、丁寧にアドバイスをしていた。

僕たちのいるあたりには、一時間もしてからやっと来

た。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗り込んだ二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。

「どれ、振ってごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウェア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りではできなかったが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、顎を引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「体の真ん中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒められる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。

そして、だ。安斎がいよいよ、本来の目的に向かい、一歩踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚き、同時に、草

る。

安斎は絶るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように、言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで、安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかける安斎に、目をやった。自分に向けられた槍の切っ先の形を、じっと確認するかのようにではあった。むっとしているかどうか分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよく臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言っているんだ」

壁がどうしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁という生徒がいること自体、忘れていた気配すらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと、緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やってごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米はすかさず、注意をした。

草壁はびくつと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても、ぶかっこうで、バランスが悪かった。腕だけで振っているため、どこか弱々しかった。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた生徒が、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田が誰かが、「オカマの草壁」と囁いた。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の生徒たちが、「草壁のことを下位に扱っても良し」と決めている節はあ

「子どもたち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚を決めたのが分かり、僕は気がではなかった。

打点王氏のほうはといえば、大らかなのか、鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁は顎を引くと、すつと構えた。先ほどよりは強張りはなく、脚の開き方も良かった。

先入観を、と僕は念じていた。そのバットで、吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もが呆気に取られ、草壁がいちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではなかった。むしろ、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目を瞠るほどではなかった。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらも、風の音がした。「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を見て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に「瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、誰にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞー」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの生徒たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」選手は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君に

やってみたいいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、乗りかかった舟、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘をつき通すべきと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか、いやもしかすると、豪放磊落の大打者は、あまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

D 久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気になるんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

は素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。白く輝き、肚の中から光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指先にまで辿り着く、充足感があった。草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

その時、久留米がどういう顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となつては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞を發したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々といなす。「でも、草壁君、野球ちゃんと

念押しする口調が可笑しかったから、いく人かが笑った。場が和んだといえは、和んだが、わざわざそんなことを言わなくても、と僕は承服できぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

Y 「先生、僕は」草壁はゆつくりと「僕は、そうは、思いません」と言い切った。

E 安斎の表情がくしゃつと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなつた。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

(伊坂幸太郎「逆ソクラテス」による)

【注】

*豪放磊落——気持ちが大きく、小さなことにこだわらないさま。

問一 文中の にあてはめるのに最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 脚 イ 腕 ウ 心 エ 身

問二 — 線部 A「安斎が舌打ちをするのが聞こえた」とありますが、それは何に対する舌打ちなのか、説明しなさい。

問三 — 線部 B「自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのようではあった」とありますが、久留米は何を確認しているのか、説明しなさい。

問四 — 線部 C「いいぞー」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した」とありますが、どのように僕に聞こえたのか、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲を驚かせて自分の指導に注目させようと意図する鋭い声。

イ 自分たちを取り巻いていた緊張や不安を打ち破るような力強い声。

ウ 僕との約束を果たすため久留米に自分の指導力を見せようと張り切る声。

エ 思うようにならない草壁に対して久留米以上に^{あつとう}圧倒するような迫力のある声。

問五 — 線部 D「久留米はそこでも落ち着き払っていた」とありますが、この久留米の様子に対して、僕はどう思ったのか、説明しなさい。

問六 — 線部 X「草壁はびくつと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた」と、線部 Y「先生、僕は「草壁はゆつくりと」僕は、そうは、思いません」と言い切った」の草壁の態度の変化について、その原因をふまえて七十五字以内で説明しなさい。

問七 — 線部 E「安斎の表情がくしゃつと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ」とありますが、二人の笑顔の意味を説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「伝統」が話題に上がる場合、「昔」というのは、必ずしも客観的に見た年月の長さを基準にしたものではありません。

たとえば甲子園の野球など、わずか三、四年の間、勝ち続けられ、その学校は「野球の名門校」として全国に知られるようになるのみではなく、その野球部は野球の強豪としての伝統を誇るようになります。さらに不思議なことに、野球部員たちは、その伝統を盛り立てることに誇りを感じ、チームは以前にも増して強くなつてゆきます。

このように、「伝統」は、トウジシヤたちと周囲の人びとの心の持ち方次第で、わずか数年のうちに確立されることさえあり得るのです。食べ物の場合、人びとに受け入れられる時期が、わずか数カ月から一年程度で、その後は忘れられてしまったならば、それは単なる「流行」であつたしか見なされません。しかし、ある種のラーメンや丼物、弁当の類は、わずか数年、十数年という短期間のうちに日本全土に広く定着し、さらには海外にまで「日本の料理」として受け入れられるようになりました。それらが発売された当時に生まれた子どもたち、すなわち現在は十代を超える

ときに、自由に考えているようですが、必ずその身体や思考に浸み込んだ根拠を支えとしています。そして、その根拠は個人的に身に付けたもののように感じています。多分に当人が生まれ落ちた土地の文化に枠づけられたものなのです。

たとえば、朝起きて食事をとるのは、日本の伝統的な食事のあり方です。その時、ご飯に味噌汁をかけて食べる人がいますが、それも日本の伝統です。【2】日本を訪れたばかりの韓国人に、ご飯と味噌汁を出して、それを混ぜて食べるようにと言ったならば、日本の人とは反対に、味噌汁にご飯を入れ始めるでしょう。その人は、韓国での伝統にのっとり行動を起こしたのです。

食べ物の伝統に関しては、さらに重要なことがあります。元来、伝統というものはそれを創り出した人物が不明であることが普通です。【3】一、焼き芋は、日本の伝統料理ですが、誰によって始められたのかなどということとは分かりません。今から、わずか二、三〇〇年ほど前のことならば、料理の種類によってはそれを発明した人物を特定することができるでしょう。そして、多くの場合、発明者は一人の人物です。しかし、現代では大勢の人が集まっ

歳になつていく子どもたちは、そうした食べ物が日本の伝統食であることを疑うこともなくなつていくのです。

また、日本の食べ物といえば、その代表とされる天麩羅や寿司でも、天麩羅はたかだか三〇〇年余りの歴史、握り寿司では一八五年ほどの歴史しか持っていない。ちなみに、徳川家康が鯛の天麩羅を食べて当たつて死亡したという有名な話がありますが、実際に天麩羅という名称が記録に登場するのはもう少し後で、さらに天麩羅が庶民の食べ物として広まったのは一九世紀の始め頃とされています。こうした事を考えてみると、伝統というものは、必ずしも「昔」から続いてきたことに重点を置くべきものでもないようです。

【1】、「伝統」とは何なのでしょう。

わたしはいつも、「伝統」とは、「ある時代の、ある土地に生きる人びとが、目の前に現われた事物に対応し、なんらかの行動を起こそうとする際に、我知らず、拠り所としてしまう事物である」と話してきました。

言いかえれば、人びとが日常生活の中でとる行動や思考の支えとも言ふことが出来るかもしれません。人は、何らかの事物に対して行動をするとき、あるいは、物を考える

て、共同で人為的に伝統を創り出そうという動きが目立つようになりました。

日本においては、特に第二次大戦後は、「伝統創り」は産業と強く結びついて来しました。その最も活発な例の一つが、いわゆる「村おこし」、「町おこし」運動です。伝統の活用は、落ち込んだ地方経済を救うための、いわば目玉商品となります。食べ物は、当然、その種の運動のカツコウの売り物になりました。地元の知識人が集まつて、その土地に何か「伝統」として売り出せる素材はないかと探し回り、仮にその種の事物が見つかったとします。たとえば、歴史に名を残す偉人が見つかったならば、その人物にあやかって、商品となるような何らかの食べ物を創り出す計画に着手します。水戸黄門が諸国漫遊の際に宿をとったなどという言い伝えが見出せば、それが単なる伝説であることは分かっていますが、黄門饅頭、黄門煎餅、黄門ビールから、素材そのものを商品化する黄門トマト、黄門イモなどという食べ物に至るまで、様々な形で土地の産物を利用した商品としてデンカイするといった例は、日本中あらゆるところで見る事ができます。それどころか、その素材の大部分を他の土地の産物に依存すると言つたものまでもが、土

地の伝統として売り出されることも少なくありません。

古いままの形で守られているものこそが伝統であると、多くの人は信じています。しかし、伝統はどこかが少しずつ変化してゆくからこそ、新しい時代の中で存続してゆくことができるのです。

では、伝統は、如何なる形で変化を遂げてゆくのでしょうか。まず、伝統はいくつかの構成要素から成り立っていることに注意が必要です。たとえば、その土地に代々伝えられてきた酒を例に考えてみましょう。その酒は、酒の素材、醸造方法、味、香り、色、容器、名称、その酒を取り巻く物語など、いくつかの構成要素によって支えられています。しかし、その酒を詳しく見てみると、昔はその地域でとれた米を使っている、現在では地域外の米を使用するものとなっていたり、醸造方法もよりエッセイ的で経済的なものに変えられるといったことが普通です。時代に即して、容器を洒落た瓶にするといったことも、よく見られます。伝統の特徴の一つは、人びとがそれに関心を持っている限り、その構成要素の一部を時代に即したものに変わるといった形で、無限に新しい命を持ち続けることなのです。

さらに、そうした形で変化を続ける一方で、何故、それが伝統として認められるのでしょうか。それは、伝統の「核」となる要素、つまり、その時代に生きる人びとがその伝統にとって中心的であると見なす部分が守られているからです。

三〇年ほど前に、わたしなりの「伝統」の考え方を、「未来を懐かしむ」というタイトルで文章にして書いたことがあります。それは、「伝統」について一般的に言われるようなこととは全く異なるもので、多くの人が 抱く発言 であつたようです。伝統は過去から現在までという考え方が、人びとの頭に浸み込んでいるからでしょう。

しかし、わたしの考え方では、伝統とは、何か行動を起こす時に、無意識に頼ってしまう拠り所なのです。

「4」それは過ぎ去った過去の事実ではなくて、人びとの中に息づき、その未来に向けた行動を支えるものであるとも言えるのです。

そもそも伝統を省みるということは、まず未来に向けて何らかの行動を起こそうとしているからです。そして、そこに過去を活かそうとする試みだということが出来るでし

よう。だからこそ、わたしは「未来を懐かしむ」という表現を使ったのです。

ごく当然のこととして何かを食べる。その未来にかけて起こされる行動の中にこそ、伝統は生きていと言えそうです。

(西江雅之『食べる』による)

問一 1 4 にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ すなわち ウ そして エ たとえば オ では カ ところが

問二 文中の にあてはめるのに最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 違和感 イ 失望感 ウ 親近感 エ 絶望感 オ 喪失感

問三 線部A「伝統」が話題に上がる場合、「昔」というのは、必ずしも客観的に見た年月の長さを基準にしたものではありません」とありますが、では、「基準」となるものは何か、文中から二十字以内で書き抜きなさい。

【注】

* 徳川家康——戦国時代の大名で、江戸幕府初代将軍。

* 水戸黄門——江戸時代の水戸藩主・徳川光圀のこと。

* 諸国漫遊——ほうぼうの国をのんびり旅行すること。

問四 — 線部 B「我知らず、抛り所」としてしまふ」とありますが、なんらかの行動を起こそうとする際に「我知らず、抛り所」としてしまふのはなぜか、文中の言葉を用いて簡単に説明しなさい。

問五 — 線部 C「さらに重要なこと」とありますが、食べ物の伝統に関して「さらに重要なこと」とは具体的にはどんなことか、解答欄に合うように答えなさい。

本来、

「」。

問六 — 線部 D「如何なる形で変化を遂げてゆくのか」とありますが、変化を遂げてゆくときの特徴として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア「核」を創造しながら構成要素の一部を時代に有益なものに変える。
- イ「核」を破壊しながら構成要素の一部を時代に必要なものに変える。
- ウ「核」を保持しながら構成要素の一部を時代に適合したものに変える。
- エ「核」を改良しながら構成要素の一部を時代に流されないものに変える。
- オ「核」を容認しながら構成要素の一部を時代に支配されるものに変える。

問七 — 線部 E「未来にかけて起こされる行動の中にこそ、伝統は生きている」とありますが、筆者がそう考えるのはなぜか。「古い」「新しい」という二つの言葉を用いて、七十五字以内で説明しなさい。

問八 — 線部 ①～⑤のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。